

武庫川女子大学  
武庫川女子大学短期大学部

第8号

FDニュース



● 目 次 ●

- |                                  |   |
|----------------------------------|---|
| [1] 学科FDの取り組み<br>情報メディア学科        | 2 授業公開の状況と本学における「自立を促す教育」の今後の取り組み方針について |
| [2] FD推進委員会の活動報告<br>1 FD学生座談会の報告 | 3 第1回FD勉強会、第2回FD勉強会の報告                  |
|                                  | [3] シリーズ授業                              |
|                                  | [4] 編集後記                                |

## 学科FDの取り組み

情報メディア学科 学科長 福島 秀行

改めて学科としての取り組みを問われるならば、実は自慢できるようなものは何もない。もちろん何もしていないわけではない。当然のことだが、教員一人一人は、教材を工夫し、教授法を改良し、学生の評価を収集・分析し、担当する授業をより良くするための努力を継続している。ただ、これは教育者の本能に近いもので、FDと声高に叫ばれなくても、個人レベルではこれまでも実施してきたし今後も継続されるべきものだろう。学科全体としては、学科の将来像というテーマでほぼ2年近く議論を重ねて来た。今後社会の要請に応えられるのはどんな人材か、そういう人材を育成するために学科は何をすべきか、どのようなカリキュラムや教育手段ならそれを達成できるか、果たして受験生は学科の方針に賛同してくれるか、等々さまざまな面から意見を交わしてきた。その過程で、新たなカリキュラムが体系化されると共に、単なる講義でなくアクティブラーニングを拡充させて学びの主体を学生に戻す等、授業形態や指導方法についても教員間の認識を一致させることができた。これを学科FDと呼んで良いなら、そうかも知れない。しかし、FDと言いつつには何か物足りない。



FDが日本に導入されてから30年以上経つと思うが、私の知る限り未だに適切な日本語訳がない。内容も幅がありすぎ、教員一人一人の捉え方も様々である。私は、個々の教員の教育・研究活動の改善という狭い意味の実践活動であったものを、大学全体で取り組む組織的かつ継続的な活動に引き上げた点にFDの意義があると考えている。従って、本来であれば、いかに教育効果を上げるか、いかに確実に研究成果を得るかという永遠の課題に向けて、教員にとっては間接業務である事務の効率化や教材準備等の授業支援も含め、教育・研究全般に関する大学の組織的な支援の在り方が同時に議論されなければならない。単に教員の教授力向上という狭い取り組みではない。現状では、その大きな視点が欠けていると思われる。

前述の学科内の議論の過程で見えてきたFD推進上の障碍は、カリキュラム編成の不自由さ、必要な要員をダイナミックに確保できない人事制度上の制約、教授方法に適した教室の不足という設備上の問題、社会との連携を強化しようとしたときの予算上の制約等、大学全体の組織・運営に関する問題ばかりである。例えば、なぜ毎週同じ時間帯に1コマずつやらなければいけないのか、PBL (Project Based Learning) 的な授業なら、進行局面毎に必要な時間と集中度合が異なり、丸一日そればかりを行う局面も出て来ても良い。残念ながらこういう自由な授業は今の教務制度では実現が難しい。こうした問題を同時に解決しない限り、従来と同じような自分たちの出来る範囲での改善にとどまり、結果としてFDはどんどん矮小化していくだろう。FD推進委員会に期待しているのは、全学的な司令塔として、個人や学科の動きと大学全体の動きをうまく連携・協調させると共に、より高い視点から委員会でなければ出来ないことを実施することではないだろうか。

## FD 推進委員会の活動報告

### 1 FD 学生座談会の報告

学生・教職員 FD 小委員会主催のもと、平成24年7月13日（金）午後4時30分から公江記念講堂地下第二会議室において「留学生とともに考えるFD座談会」が行われました。

#### 参加学生氏名及び留学先

大学文学部英語文化学科4年	浦川 真実さん	韓国・韓南大学
大学文学部英語文化学科4年	稲田 彩芳さん	米国・セント・マーチンズ大学
大学文学部英語文化学科4年	菅原柚布子さん	カナダ・マウントロイヤル大学
大学文学部英語文化学科4年	佐藤菜歩子さん	米国・ルイス・クラーク州立大学
大学音楽学部演奏学科4年	権藤 綾実さん	韓国・梨花女子大学



#### 参加教職員

糸魚川直祐	(学長)
濱谷 英次	(共通教育部長)
渡邊 完児	(FD 推進委員長、健康・スポーツ)
西山 明美	(FD 推進副委員長、日本語日本文)
田中新治郎	(FD 推進委員、健康・スポーツ)
大岡 由佳	(FD 推進委員、心理・社会福祉)
肥後有紀子	(FD 推進委員、情報メディア)
荒木 聡美	(国際交流課長)
山田 雅子	(諸資格指導室指導課長補佐)

#### ■ 司 会 大岡由佳 FD 推進委員

肥後有紀子 FD 推進委員が作成したスライドをバックに始めました。

荒木聡美国際交流課長による留学生5人の紹介

- 司会 皆さんの海外の授業体験をお話いただきます。まず始めに学長の糸魚川先生。
- 糸魚川学長 皆さんの経験した話を期待しています。教員の授業が少しでもよくなるヒントを出したい。皆さん方の留学の経験を聴かせて頂いて、我々教員の授業、教育活動に少しでもプラスになればいいと思っています。
- 渡邊委員長 FD 推進委員長をさせていただきます。現時点で大学教員の授業公開をずっとやっています。その意図はまさにFDということになります。教員がよりよい授業をするために、質的に向上するような授業を目指して、日夜励んでいますので、学生からもいろいろな、建設的な意見をよろしくお願いします。
- 司会 ご自身の体験、考え、留学の動機などお話しください。
- 浦川さん MFWI の体験から、語学ができればもっと世界中の人とつながっていけると気づき、韓国への留学を決めました。
- 佐藤さん MFWI の経験から、より強く行ってみたいと思いました。
- 稲田さん MFWI での経験から、そこで学んだことをさらに生かして、また自分の視野を広げたいなどと思いました。
- 菅原さん 海外に日本の文化を伝えるためには、語学力は絶対に必要だと思っています。MFWI のエクステンションプログラムに参加して、もっとグレードを上げたいと思い留学を決めました。
- 権藤さん 二十歳になったときに韓国の文化を大切にしたいと思い、韓国に留学しました。
- 浦川さん 印象に残った授業は、歌から韓国語を学んだことです。歌いながら、習った文法がそのまま授業に出たり、学びやすかったのが印象に残っています。留学中は、予習よりも復習に力を入れました。教え方は、語学ですが、前回の授業で習ったことを次の授業の冒頭で復習をするのが特徴でした。講義中心の授業は、ノートをとりな

から受講しました。また、テーマを指定され授業の用意を指示されプリントや資料も全部学生が用意して、それを評価するといった形の授業がありました。授業中は、私語をする学生は少ないと思いました。韓国の大学の図書館は24時間開館されており、テスト期間中は、朝から場所取りのために並ぶ熱心な学生の姿が印象的でした。1学期に中間、期末テストと2回ありました。韓国の大学は学生の活動が盛んで、学科毎に合宿、新入生歓迎会、運動会があり、学生同士の結びつきが強かったように思いました。

- 司会** 先生方におかれましては、いろいろご質問もしたいかと思いますが、一通り学生にご発表いただいてから、意見交換という形でいろいろと質疑をしていきたいと思います。
- 佐藤さん** 印象に残っているのは、パブリックスピーキングという授業です。クラスメートの前でプレゼンテーションをするものです。他にもシアターという演劇の授業がありました。留学中の勉強方法ですが、予習する余裕がなく、教科書を読んでいました。復習は、授業中の意味がわからなかった単語を調べたり、ノートを見直したり。授業形式は、ほとんどが参加型でしたが、歴史の授業だけ講義形式でした。アメリカ人学生の受講態度は、日本と違って私語はありませんでした。挙手して質問して、その人の意見に対して学生が意見を言うというディスカッション形式でした。みんな真剣に取り組んでいました。武庫女と違う点は、少人数のクラスが多く、ディスカッション形式が多かったので、学生中心の授業という印象を受けました。
- 司会** これだけはというようなことがおありですか。思い出して。続いて稲田さん。
- 稲田さん** 印象に残る授業は、イングリッシュサーティーセブンという授業です。少人数のディスカッション形式です。授業の予習は主に本読みや教科書を読みました。復習では授業で習ったことや、テストに向けて、まとめることをしました。教育学の授業では、教科書の1チャプターを私達がまとめて、クイズやゲームを作り、次の授業でそれを発表して、その中で答えていく形式でした。少人数のクラスが多く、学生と先生の距離が近く、各人のレベルに合わせた指導でした。カレッジライティングという英語の授業では、先生が学生のレベルに合わせて、ディスカッションをする授業でした。シラバスがきっちり決まっていて、次の課題やレポートに取り組む方法や内容を確認しやすかったです。大人数での講義では、聞くだけですが、各人のレベルに合わせた指導でした。課題量も多く、英語の授業は毎日勉強しないと無理という状態でした。積極的に自分の意見を発表する人が多く、学生一人一人のモチベーションも高く、やる気を感じました。
- 菅原さん** 印象に残った授業は、マーケティングの授業で、グループワークが中心です。ディスカッションしてアイデアを出すという授業です。課題も、自分たちで商品パッケージを作ったり、戦略を考えたり実践的で自分たちでアウトプットするという授業でした。専門性が高く、就職先に直結していると思える点が違うと思いました。予習は基本的に教科書や、パワーポイントの内容をチェックして授業に挑みました。復習は、理解できてない範囲を重点的にしました。不明な点は、先生にメールやオフィスアワーを利用して質問しました。教員は、パワーポイントの利用が多かったです。マーケティングの授業では、実際にどの広告が有名かウェブサイトやユーチューブを使って視覚的に理解させるという指導法でした。受講態度は、基本的にみんなまじめで、ノートをとります。質問があれば、積極的に挙手します。
- 権藤さん** 印象に残った授業は、全授業の20%位は英語で行われていました。友達からも韓国語でなく英語で話しかけられました。音楽学部で、音楽療法の勉強をしており、その授業が英語でしたので、難しかったです。基本的に復習を中心にしました。予習は、先生の話全部聞けるようにと、単語を調べて授業に臨みました。留学先での指導法は、一方的な授業ではなく、ディスカッション形式が多いです。学生の態度は、私語も、寝る人も、欠席者もあまりいません。授業のレベルは高かったです。期末、中間テストもあって図書館も24時間開館していて学生が勉強に取り組む態度も熱心でした。
- 司会** 各先生方もご質問があるかと思いますが、意見を頂戴できればと思いますが。
- 糸魚川学長** 英語で授業をする科目を増やそうと思っています。これは日本のどの大学も国公立を問わず、英語での授業を導入していく必要があると思います。その時に上手に話せる先生が、英語で授業したらいいですが、下手な先生でも英語で授業をした方がいいかどうかを、あなた方に聞いてみたい。
- 菅原さん** 英語を話すとき一番大切なのは、自分から伝える力、伝えようとする英語を、自分の発音が悪くても、気持ちがあれば伝わるということを留学の経験の中で感じました。だから下手でもとりあえず英語にふれるという機会は、グローバル化していくには大切だと思います。

- 司会** ぐっと今、うなずいておられましたか。
- 浦川さん** 英語に触れる機会があるということ、ちょっとでも英語に自然に向き合えるようにするためなら、授業を英語ですることは、いいことだと思います。
- 稲田さん** 私は、逆に全部英語にする必要はないと思います。
- 権藤さん** 私は下手な英語の授業だったら絶対うまい人がやるべきだなんて思います。いきなり英語で授業をするのではなく、日常の簡単な、例えば歌から始める英語の授業とか、英語に自然にとりかかれる授業にすることは、いいことだと思います。
- 糸魚川学長** もう一つ質問します。アメリカ、韓国のクラスのルームサイズは、いかがでしたか。50名以上の授業を受けたことはなかったですか。何かワンポイントをお願いしたいな。
- 稲田さん** 講義の授業はあったけど、それでも少人数で30人程度です。
- 糸魚川学長** 30人ぐらいですか。大体皆さん方が受けた人数の上限、30名なら30名でワンポイントアドバイスを願いたい。我々に対するワンポイントアドバイス。
- 稲田さん** やっぱり質問することが大事じゃないかなと思います。
- 糸魚川学長** 学生に質問させる、教師が学生に質問するということですね。
- 稲田さん** そうですね。例を挙げさせるとか。なるべく授業に取り入れるという、一緒に参加させることが大事じゃないかなと思います。
- 菅原さん** 30人程度の授業でパワーポイントを使って、それを印刷したもので授業があったんです。日本では教科書を使う授業を一方的に聞いている、事前に授業の内容を知るという機会がないので、授業に入りにくい。事前に準備する時間があればいい。
- 糸魚川学長** はい、わかりました。
- 権藤さん** おもしろい授業がみんなの気を引くと思うんですけど。
- 糸魚川学長** おもしろって、内容をおもしろく。
- 権藤さん** そうですね、内容を。
- 糸魚川学長** 学問的におもしろくする。
- 権藤さん** 勉強をおもしろく説明するみたい。難しく説明されても全然わからないし、眠たくなるんで、難しい内容でもおもしろくとか、先生の体験談とか面白く頭に入ると、みんな集中して聞かなくないかなと思います。
- 糸魚川学長** わかりました。教師って相当、高い能力が要求されるんだね。
- 司会** 佐藤さんはどうですか。
- 佐藤さん** 60人ぐらいの授業が、大きいクラスだった。
- 糸魚川学長** 60人。どんな授業。
- 佐藤さん** 心理学の授業ですけど、パワーポイントを使ってそれをメモ。その授業は武庫女の大人数のクラスと比較にならない。要は学生のやる気だと思います。
- 糸魚川学長** アメリカでパワーポイントは大人数、30、60人では使ってる。それはアメリカ、韓国、カナダの先生の間でパワーポイントを使うことについての論議、それを使うことの是非などの意見はありますか。
- 佐藤さん** 教科書もよく使っていました。教科書とパワーポイント。
- 浦川さん** 学生に何かを発表させる、発言できるような授業だったらすごい。参加型の授業は、自分の身につくことがわかるし、楽しみながら授業ができる。クラスの雰囲気もよくなると思うので、学生をもっと参加させるような授業がいいと思います。
- 糸魚川学長** ありがとうございます。先生方、……参加型や言うてるんで。
- 濱谷共通教育部長** もしも武庫女の科目でも、学科の専門科目で、かなり学年が自由に入れるような形態を考えたとしたら意味あるだろうか。
- 権藤さん** 武庫女では、1年から4年までいても意味がないと思います。
- 濱谷共通教育部長** それは、例えばどういうあたりで意味がないと。
- 権藤さん** 例えば必修で、1年から4年の間で取ればよかったら、だらけてしまうと思います。日本の大学は

大抵4年間で卒業しますが、現地の学生は留学のために1年とか2年間を休学にする人が多いので、受講生の学年がばらつくのが多いのだと思います。

- 濱谷共通教育部長 今度は全体を通して、留学から帰ってきて、普通の授業を受けた時に、周りの友達と違和感を覚えなかったですか。感じた場合、それはどんな点ですか。
- 菅原さん 例えば、ゼミの授業でリーディング、ライティングのわからない部分を、そのままにして、質問もしないで授業終わってから友達に聞く、というのがあって、積極性がない。全体的に学生のモチベーションに差があって、それに自分もならされてしまった。
- 濱谷共通教育部長 少し腹立たしい、そこまでいかない。
- 菅原さん 自分自身に対して、何でモチベーション上げにくいのかなというのはありますね。
- 濱谷共通教育部長 僕が二十数年前に授業のアンケートをとって、評価してくれた言葉が「近くに先生が来てくれたから質問できた」という。それ以来できるだけ学生の近くに行くようには心がけてる。しかし、それには教師としても限界がある。
- 司会 いかがでしょうか。先生方からでも、また学生からでも構いませんが。
- 渡邊委員長 あなたたちが行った大学は、ほとんどが少人数制ですか。大人数というのはないのですか。
- 菅原さん 私が取った授業の中ではなかったです。
- 渡邊委員長 ほかの授業はどうですか。専門科目の授業とかは。
- 菅原さん テストに使う教室も全部少人数用でした。大人数の講義はほとんどない。マウントロイヤル大学、カルガリー大学では、講義型の大きい授業もあったみたいです。
- 田中委員 先ほどの議論の中に、授業中に、わからないということを質問することが躊躇されるという点は、大学や教員側の問題と学生側の問題、両方あるとは思いますが。留学経験で、武庫女の授業の中で、わからないことを質問することができないだろうか。大学教員側の問題、学生側の問題、どちらでもいいので声を聞かせていただければと思います。
- 菅原さん 武庫女のネイティブの先生は質問して授業の中断をしてほしくないと思っている。学生が質問するという気持ちは、プライドとか、自分がわかってないのが恥ずかしいと思ったり、周りに知られたくなかったりとか、学生の気持ちの問題も大きい。
- 田中委員 教員は、予定してる講義の中身が消化できないので、授業をとめてくれるなどというような態度等が出てきます。
- 菅原さん そうですね。質問があれば最後に、その間に忘れるんですね、何を質問したかったのか。
- 権藤さん 質問とかしないのは、やっぱり恥ずかしいとか、そういうのすごくあると思うんですけど。何人かがわからないという質問をしてしまえば、そういう波ができて、質問とかする子がすごく増えると思うので、今は多分だれ1人質問しないから私もできないみたいな感じになってしまってると思うので、1人か2人でも質問をさせるような環境をつくれればもっと言いやすくなるんじゃないかなって思います。
- 司会 最後、学長先生、全体を通して、もしもよろしければ。
- 糸魚川学長 まず、ありがとうございます。今日は僕は、いろんな先生方から羨ましがられて来てるんですよ。皆の話をもっと聞きたかった。聞きたい先生もたくさんいるんだ。学生の皆さん方の意見だと教員は動くんです。これは事実なんです、すごい力。
- 司会 ありがとうございます。
- 西山副委員長 最後に、留学後何が変わったか皆さんにお聞きしたい。
- 司会 では佐藤さん、いかがですか。
- 佐藤さん いろいろやりたいことが増えました。
- 司会 では、稲田さん。
- 稲田さん 留学を通して自分の視野が広がったなど思いました。そして、日本もすごくいい国だなということに気づかされました。
- 司会 では、菅原さん。

- 菅原さん すごく積極的になったと思います、何事に対しても。
- 榎藤さん 興味がいろいろ増えたんで、やりたいことがすごく増えました。
- 司会 留学して勉学を通して皆が、よりよく変わったということは、私たち武庫女の誇りでもあります。是非こういった学生を一人でも増やしていくために、私たち教員も頑張っていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

興味津々に聞いていた教員からは、英語で行う授業の是非・クラスの規模・指導の厳しさの中身について等々、多くの質問が出されました。最後に、糸魚川学長から「FDを推進し、教員を動かすのは学生の声であり、多くの教員に学生の声を聞かせたい」という希望が述べられ、充実した座談会を閉じました。

(FD推進委員 田中新治郎)



※ FD学生座談会は、紙面の都合で大幅に割愛せざるを得ませんでした。全文は、武庫川女子大学ホームページ「FD推進委員会」の中に掲載しています。

## 2 授業公開の状況と本学における「自立を促す教育」の今後の取り組み方針について

2012年度における前期「授業公開」では、これまでと同様のスタイル、すなわち「授業公開」をする側の公開日程の開示に基づき、学内教職員に積極的な参観を促しました。

しかし、「授業公開」は能動的に参観をすることに意義があります。このことから、FD推進委員会では、“いつでも”、“気軽に”、“自由に”参観できる体制を整えることが重要と考えました。そこで、後期の「授業公開」より、「原則随時参観を可能とする」ことで学内のコンセンサスが得られました。ただし当面は「授業公開期間（前期・後期）」を設けて公開することにしています。これにより参考になりたい教員の授業は、教職員はいつでも参観が可能になりました（※事前に参観希望を公開者に伝達することが望ましい）。これで歴代のFD推進委員が努力をして取り組んできた「授業公開」のあり方が、ようやく他大学並みの位置づけになりました。

ところで、今年度は本学における教育改革を推進するための各種委員会（「教育改革推進委員会」、「FD推進委員会」）に加えて「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会が発足されました。

中央教育審議会（大学教育部会）では「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」の答申が出されました。そして、大学として早急に取り組むべきこれからの具体的な改革方策として、①体系的な教育課程、②教員同士の役割分担と連携による組織的な教育、③アセスメント・テストや学修行動調査（学修時間等）等の活用による、学生の学修成果、教員の教育活動、教育課程にわたる評価、④教育課程や教育方法等の更なる改善、が挙げられています。

前述しました本学の新たなプロジェクトとしましては、昨年9月に③にあたる“学習状況に関する調査”をいち早く実施致しました。この分析結果はすでに冊子「学習状況に関する調査結果報告書」としてまとめられており、この結果に対する議論を平成24年度内に終え、本学における今後の教育改革推進並びにFD推進活動に役立てます。

さらに、本学はPBLの導入について検討が始まっています。PBLという略語はすでに教育現場では専門用語として定着しています。この語源には2種類あり、1つはProblem Based Learning（問題発見解決型学習）です。大学のセミナーでは「身近に感じられる具体的な事象から問題（課題）を発見し、学生の能動的な学習およびグループ学習を通してその解決を求めさせるセミナー」として取り入れるものです。もうひとつはProject Based Learning（プロジェクト遂行型学習）であり、「特定の到達目標を定め、グループワークを通してプロジェクトを遂行するセミナー」と言われているものです。

現在、教育改革推進委員会とFD推進委員会のメンバーとがPBLを推進している大学を視察し、本学でも有効に機能させるために、ハードとソフトの両面について研究をして、導入することを計画中です。FD推進委員会では、PBLを授業に如何に導入していくかが来年度からの重点検討課題の1つと考えています。

(FD推進委員長 渡邊完児)

### 3 第1回FD勉強会、第2回FD勉強会の報告

平成24年度FD講演委員会では、「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクトとの合同開催で2回のFD勉強会を開催しました。今年度は深く議論することを目的としています。第1回、第2回ではこの分野における最先端の研究者を招いて話題提供をいただき、質問や意見交換とともに、各学科・各分野の事例紹介なども含め議論を深めました。

#### 第1回FD勉強会

テーマ：「ディープラーニング／アクティブラーニングと自立させる授業づくり」

日時：平成24年7月4日（水）17：00～19：30 話題提供約30分、質疑討論約90分

場所：中央キャンパス C-808会議室

話題提供：田口真奈先生／京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授、専門は教育工学

#### 第2回FD勉強会

テーマ：「ディープ・アクティブラーニングと自立させるカリキュラムづくり」

日時：平成24年10月3日（水）17：00～19：30 話題提供約30分、質疑討論約90分

場所：中央キャンパス 講堂地下第2会議室

話題提供：松下佳代先生／京都大学高等教育研究開発推進センター・教授、専門は教授法・カリキュラム論

第1回FD勉強会では、授業の工夫・教員組織・カリキュラムが相互に関連することの説明のち、授業に焦点をあてて話題提供をいただきました。ディープ・ラーニングとは、主体的に概念を理解することを目的とし、概念を自分の既有知識や経験に関連付けて共通する原理を見出そうとする学びです。大学におけるディープ・ラーニングでは、

①最も大切なのはカリキュラム

②環境が大切。学びやすい環境、主体的学習を生むデザインであること。

③教員一人からでも始められるのが授業改善

と紹介されました。適切なカリキュラムとするために、ハード面の環境整備は重要であり、教員個人がコツコツする努力をはるかに凌ぐ影響があります。教室計画、図書館計画など多くの大学が取り組み始めています。ソフト面としては、学生の前知識を知的に揺さぶる内容、提示方法の工夫、学生からのフィードバックの積み重ねで学生の自己関与を高める授業が求められます。

第2回FD勉強会では、カリキュラムに焦点づけてご講演いただきました。学びの三位一体論として、学習者と対象世界との関係・学習者と他者との関係・学習者の自己との関係があります。例えば医療教育分野では、まず学習者に対象世界を明確に位置づけるために、入学すぐの段階で現場を体験させるアーリー・エクスポージャーやインターンシップです。ただし、職場は学習にとって良い場所でない点もあることから、教育の場にOSCE、OSCE-Rが導入され始めています。臨床実習に出す前の試験Objective Structured Clinical Examinationであり、Reflectionを加えてOSCE-Rとします。いずれも学生の役割分担で行われ、一度目のOSCEの失敗をディスカッションを通して気付かせ、再度OSCEを実施することで自らの成功体験として体得します。他者との関係、自己との関係を通じた学びを経て現場に臨む「リアルな状況で、仲間とともに、失敗しながら、学べる場」を目指すものです。

このように、ディープ・ラーニングのためにアクティブ・ラーニングが導入されます。図1は外的・内的な学習活動を示します。授業では身体的に静かに聞き頭の中もよく活動して学習する状態（B）を目指しますが、まず身体的活動により頭の中も活動させ学習する状態（A）、すなわちアクティブ・ラーニングをステップとするものです。学生主体型授業は高い指導力が必要であり、本学のように資格科目の多い大学においては強制的に勉強させる部分と自主的に勉強させる部分のバランスに配慮しながら、ディープ・ラーニング、アクティブ・ラーニングに取り組むことの重要性が改めて共有されました。

(FD推進委員 北村薫子)

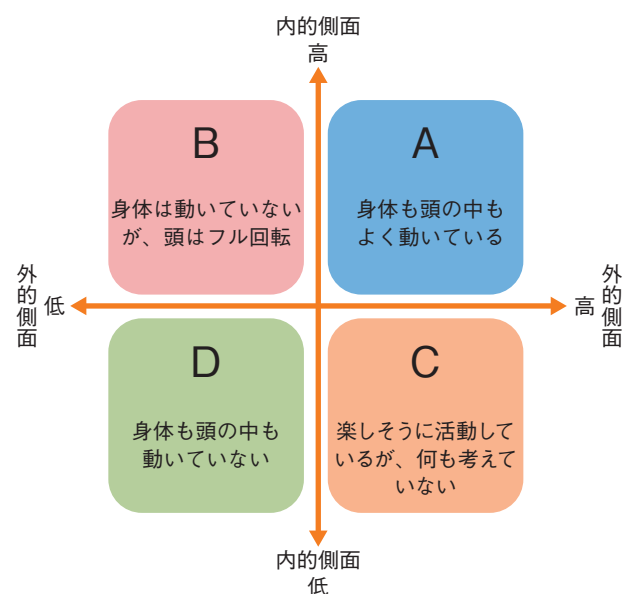


図1 外的・内的な学習活動  
(田口先生、松下先生の資料より抜粋)

# シリーズ 授業

## 「講義でクスリ」

薬学部 教授 森山 賢治

現在、薬学部の1、2年次で、学生諸氏から忌避感の強い解剖生理学の講義を担当している。解剖学には、本来、眼で見える範囲のマクロと、顕微鏡下に学ぶミクロがある。何れも、運動機能(バイオメカニクス)と、生理機能を併せ表裏として学べば理解が進むものである。一方、現状では時間数が限られているため、臓器別に多数の学名をパッケージした内容の講述を余儀なくされている。そのため、知識押し付け型の講義となり、通り一遍に教科書を読破する状態になり果てている。赴任当初より、視聴覚資料(VOD)、ゲストスピーカーとの多角討議、実験デモ講義、SGDや発表会の導入など様々トライした。目指したのは、ルーウィン教授のMIT open course ware「物理学入門講義」や、サンデル教授のハーバード白熱教室などの双方向講義であるが、比較されれば躊躇の感がある。また、学生の講義に対する価値判断基準も、“薬学共用試験の試験範囲か?”、“国家試験に出題されるか?”などという誠に実学的付近にある。よって、授業開始後45分を経過し講義に倦む頃、それらを披露することにより講義に若干の緊張感を醸しだしているが、この点は実学の極みとして反省している。斯くして未だdevelopingなFDであるが、寡少乍ら“ウケ”たFD的工夫を披露すれば、解剖生理学に関する小咄(と講義する方は事実・仮説を織り交ぜ適当に作話しているが)で、これを可及的多数披露してきた。



『そもそも集中力の持続時間として、「90分間の講義」が適切かという前提条件に思いが至る。近隣他学では、70分授業が実施されていると漏れ伝え聞く。生物には体内時計が内蔵されており、存外正確である。1年を刻む体内時計から1日24時間を刻むものまで多種あるが、ここで想起するのはウルトラディアンである。ウルトラディアンは、講義時間同様約90分を15分単位で刻む体内時計として機能し、意識レベル(集中力)(睡魔?)も同様に変動している。よって、小学校では45分授業が一般的であるし、講義中の居眠りも15分を超えて45分になるとウトウト状態から深睡眠に移行する。そのため、休憩時間に覚醒する際は非常な倦怠感を生じる。午睡や講義中の居眠りは15分前後がよいとされる所以である…』っと、拙稿の一端を借用して解剖生理小咄のマクラを展開すれば上述のようになる。この他「決断(けつだん)は立ってする」、「恋の告白は声に出して!」、「鼻持ちならない鼻は持てない」など、日常生活や生活行動で学生諸氏が経験していても実際意識することのない現象と、その背景にある解剖生理学的事象を例説している。小職の寸志は、日常生活と関連付けて理解し記憶すると解剖生理学はもっと身近になること、反対に身近な解剖生理学的事象が全く科学されていない事の訴求である。換言すると、学部生の4・6年間で何か面白そうと思えることを発見して欲しいと願い期待しつつ講義している。以前は興味をもって小咄を聴いてくれ、オチでクスリと笑った学生諸氏も幾ばく居た。そのような学生諸氏が、進級後、当ゼミに参加し研究活動に専心した経緯もあった。一方、入学生の多様化と関連の有無は邪推の域を出ないが、此の頃の授業評価のコメントは“オヤジ話は要らない”などと赤面ものである。これら学生諸氏からの酷評も、ラポールの一つの態様として真摯に読み解くよう自彊している。畢竟、FDに関して存念巡らせているところは、学生諸氏の知的好奇心を可能な限り駆り立て、学生諸氏の自発的且つ自律的な研究へのアクティブラーニングに点火することである。



### 編集後記

先日、偶然テレビで見かけたネットアニメの主人公「田中ゆとりちゃん」に愕然とした。「ゆとりちゃん」は明るくだらかな性格だが、とにかく言われたことしかやらない。「摘込(つめこみ)しおり」先輩に「どうして手伝ってくれないの?」と聞かれると「手伝ってって言われてないよ。」と答える始末なのだ。

このアニメ、他に「だんかい」係長というキャラクターも登場するなど、ジェネレーションギャップを題材にしたコメディタッチの社会派アニメらしいのだが、自分の授業のやり方が「ゆとりちゃん」予備軍を作っていないか考え込んでしまった。「双方向」「アクティブラーニング」「PBL」など学ぶべきキーワードはたくさんある。本学が取り組んでいる授業公開の機会も積極的に利用し、自分の「授業」を根本から見直したいと思う年度末である。(編集委員 MK)

【FD ニュース編集委員会】 西山明美、管 宗次、木村麻衣子、玉田健二

